

『#雪冤』（大門剛明著）を大活字本で読んでみた。著者は、1974年生まれ。本書で横溝正史ミステリー大賞+テレビ東京賞をW受賞。他に『罪火』、『確信犯』等。

1993年、京都で殺人事件が起こる（私が京大に赴任する1年前）。被害者は、合唱団に所属するNとSの男女で、2人とも刺殺されていた。その容疑者として逮捕されたのは、2人が所属する合唱団の指揮者を務めるY。Yは一貫して容疑を否認し、裁判・法廷の場でも無罪を主張するが、最終的には死刑が確定し、Yは死刑囚となってしまう。Yの父は息子の無実を信じ、再審請求の署名集めに奔走するが、署名はなかなか集まらず時間ばかりが経過してしまう。事件発生から15年後の時効寸前、冤罪・無実を訴えるYの父親の元に、“メロス”と名乗る人物から「自首したい。自分は共犯で、真犯人は“ディオニス”だ」と連絡が入るが、程なくYの死刑が執行されてしまう。Yの死により父親は無力感に襲われるが、活動の継続を訴える支援者に助けられ、本当の犯人を見つけ出すことに成功する……。真犯人は最後の最後に明かされる。本作は、橋爪功主演でテレビドラマ化されている。当初の題名は「ディオニス死すべし」。

本書は太宰治が書いた『走れメロス』が通底している。『走れメロス』を要約すると、自分が処刑されることになると承知の上で友情（セリヌンティウス）を守ったメロスが、人の心を信じられない王（デエオニス）に信頼することの尊さを悟らせる物語で（最後に王が「お前らはわしの心に勝った。信実とは妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に加えて欲しい」と言う）、50年以上日本の教科書に採用されているそうだ。だが、この物語は太宰のオリジナルではない。フリードリヒ・フォン・シラーの『#人質』を下敷きにしている（ベートーヴェンの『第九』交響曲の歌詩『歓喜の歌』で知られる）。

シラーの『#人質』をネットで読んだが、太宰治が書いた『走れメロス』との違いはほとんどなく、私には太宰のオリジナリティは感じられなかった。

読後の感想は、ウーン……。人はここまでするかという疑念も沸くが……。冤罪や死刑廃止がメインテーマと謳っているが、（結末を知ってじっくりと考えてみると）ミステリーとしての筋書きに著者が酔っているように思えるのは、私だけであろうか。